

[報告]

地域研究コンソーシアム (JCAS) 次世代ワークショップ 「バルカン研究の新展開——民族文化の越境・接触・変化をめぐる 多角的研究を目指して——」開催報告

岡野 要／菅井 健太

1.

去る 2018 年 2 月 3 日、東京大学本郷キャンパス文学部法文 2 号館 2 番大教室において地域研究コンソーシアム (JCAS) 次世代ワークショップ「バルカン地域研究の新展開——民族文化の越境・接触・変化をめぐる多角的研究を目指して——」が開催された。本ワークショップは、主催である地域研究コンソーシアムの平成 29 年度次世代ワークショップ公募（地域研究方法論枠）に採択された企画であり、京都大学東南アジア地域研究研究所との共催および日本スラヴ学研究会の後援で実現したものである。

本企画は、その名の通りバルカン半島の地域・国家に関わる諸分野の研究をテーマにしたものであった。日本におけるバルカン地域の研究は、歴史学、政治学、言語学、文学、芸術学といった分野ですでに大きな蓄積があるが、多くの研究はバルカン半島のいずれかの国家または民族を中心とした単一分野の枠内での研究が多く、分野の枠を越えた横断領域的研究や言語・国家・民族の枠を越えた研究の数は大きく限られていた。また、複数の分野にまたがる共同研究の試みも少なく、同じ人文・社会科学の分野でも人類学、保存修復学、音楽学といった分野はあまり注目されてこなかった。

このような状況に鑑みて、本企画ではバルカン半島に暮らす諸民族の文化の越境・移動・接触をキーワードに、人文・社会科学の各分野の観点からバルカン地域研究のあり方を問い直すことを試みた。民族・宗教・言語・文化・歴史といった様々な要因が複雑に絡み合うバルカンという地域を包括的かつ多角的に研究するためには、単一分野内の視点だけでなく、複数の分野にまたがる視点を持つことが重要であるが、そのような研究はそれほど容易ではなく、研究者間の協力なしにはその実現が極めて難しい。バルカン地域を専門とする様々な分野の研究者の意見交換の場を設けることで、分野や専門地域の枠を越えた新たなバルカン地域研究の可能性を探ることが本企画の主な目的であった。

2.

第一部では、長年にわたり日本のバルカン地域研究を牽引してきたベテラン研究者

3名を基調講演者として迎え、日本におけるバルカン地域研究の発展と成果、問題点そして今後の地域研究の展望をテーマにした基調講演を行った。

一つ目の柴宜弘氏（城西国際大学¹）の講演「日本におけるバルカン地域研究の発展と展望」は、歴史学の分野を中心に日本におけるバルカン地域研究がどのように発展してきたかを具体的な学会の活動および著作などの成果とともに紹介するものであった。また、柴氏がここ数年関心を寄せているドゥシャン・トドロヴィッチ（1875–1963）の生涯についても触れられた。トドロヴィッチについては、セルビア人でありながらロシア語教師として東京外国語学校で教鞭を執っていたことがすでに知られているが、故郷であるハブスブルク帝国の辺境からヨーロッパ・ロシアへ、その後は極東ロシア、日本、そしてアメリカへと生涯を通じて何度も越境を繰り返した興味深い人物でもある²。地域研究を地域全体の通史というマクロの視点と特定の人物の生涯を追うミクロの視点の両方から捉えた講演は、本ワークショップのオープニングを飾るのにふさわしいものであった。

続く三谷恵子氏（東京大学）の講演「V. ボギシッチの事績に見るバルカン地域研究の可能性」は、ダルマチアの生まれで明治日本ともつながりの深い法学者ヴァルタザル・ボギシッチ（1834–1904）の事績と地域研究の広がりをもテーマにしたものであった。講演は、ボギシッチの明治日本法曹界とのつながり、法学者としての事績、民俗学などの分野でも評価される著作の数々、そしてさらには法文集の編纂における用語の使用と言語意識など、地域研究の多面的な広がりを感じさせる興味深い内容であった。

三つ目の講演、鐸木道剛氏（東北学院大学）の「セルビア近代イコンからバルカン地域研究へ」はセルビアを中心とした正教のイコンの研究がバルカン地域を対象としたより広い研究、ひいては西歐美術との関係というコンテクストからバルカンという枠にとどまらない広がりを見せることを示すものであった。現地調査に基づく実証的な研究手法が、地域研究には欠かせない要素であると同時に、現地調査を通じて得られたデータをより広いコンテクストで捉えなおす姿勢もまた、地域研究の深化に欠かせないという事実を再確認させる講演であった。

3.

第二部では、2つの研究報告セクションを設け、若手研究者を中心とした研究報告および報告内容を踏まえた討論・議論を行った。

第一セクション「バルカン地域研究の新展開——理論と実践——」は、バルカン地域研究の方法論に関わる報告4本から構成された。第一報告者の鈴木健太氏（東京外国語大学）の報告「21世紀における「バルカン」——地域をめぐる概念と認識」は、本ワークショップの対象とするバルカンという地域が歴史や政治における認識におい

てどのように規定され、今日どのような概念として捉えられているかを問い直すものであった。続く門間卓也氏（東京大学・院）の報告「戦間期クロアチア・ナショナリズムのバルカン概念を巡る政治性」は、戦間期のクロアチアにおけるナショナリズムにおいて「バルカン」という概念がどのように定義され、またそれがユーゴスラヴィア主義の唱える「バルカン」の概念と異なるものであったことを明らかにするものであった。上畑史氏（日本学術振興会・国立民族博物館）の報告「セルビアのターボフォーク／ポップフォーク：多元主義の実践としての音楽、文化、その変容」においては、90年代以降主流となっているセルビアの大衆音楽ターボフォーク (turbo-folk) が単なる流行音楽の一ジャンルではなく、旧ユーゴスラヴィア崩壊以降のセルビア人の民族意識や社会情勢と複雑に絡み合った複合的な現象であることを示すものであった。村上亮氏（日本学術振興会・京都大学）の報告「ガヴリロ・プリンツィプ像の過去と現在——英雄／テロリストの二分法からの脱却に向けて」ではサラエヴォ事件を引き起こしたガヴリロ・プリンツィプのイメージをめぐる様々な議論に触れたもので、複数の国家・民族間における認識の差と外国人として第三者の立場からバルカン地域の研究に携わる際の視点の取り方について考えさせる内容であった。4本の報告の後には討論者を務めた木村真氏（日本女子大学）から本質を突く、的確なコメントがあり、それぞれの報告の内容に深く踏み込んだ議論が展開された。

第二セクション「バルカンの民族文化の越境・接触・変化をめぐる諸問題」は、本ワークショップの副題である民族文化の越境・接触・変化の多角的研究に関わる具体的な事例を扱った報告4本から構成された。中澤拓哉氏（東京大学・院）によるセクション最初の報告「変容するニェゴシュ——南スラヴ人地域におけるペタル2世像」は、モンテネグロ公ペタル・ペトロヴィッチ＝ニェゴシュ (1813–1851) のイメージが社会主義期から体制転換期にかけてモンテネグロおよび周辺国でどのような変容を遂げたかについて、特にニェゴシュの正典化に焦点を当てて分析したものであった。続く岡野（京都大学・院）の報告「バルカン的特徴の越境——ヴォイヴォディナ・ルシン語における接続詞 *da* の使用をめぐる——」は、バルカン的特徴を持つセルビア語との接触の結果、地理的にも文化的にもバルカンではないヴォイヴォディナのルシン人の言語にバルカン的特徴がみられることを示すものであった。日高翠氏（日本学術振興会・東京藝術大学）の報告「中世後期バルカン地域の教会堂壁画——技法と材料」では、現在のルーマニア、セルビア、コソヴォに現存する中世後期に建造された教会の壁画の技法と材料について、この地域における教会堂壁画の歴史を踏まえた上でその技法および塗料の材料に見られる特色を科学的見地から分析したものであった。菅井（筑波大学）の報告「バルカンにおける言語接触と変化——ドナウ川を渡ったブルガリア人移民のことばを中心に」は、バルカン内部における言語接触により引き起こされる言語変化について、ドナウ川を渡り現在のルーマニア領へと移住したブルガリ

ア人の言語を例に考察したものであった。このセッションの討論者を担当した山崎信一氏（東京大学）からはそれぞれの報告に詳細なコメントが寄せられ、バルカン地域研究に共通する問題意識および個々のテーマに関する報告者の認識について議論がなされた。

4.

ワークショップ当日は、朝から夕方までの長丁場であったにもかかわらず、会場には予想をはるかに上回る 80 人以上の聴衆が訪れた。これはひとえに後援である日本スラヴ学研究会をはじめとする、広報活動にご協力いただいた諸学会・協会のおかげである。来場者の中には研究者だけでなく、バルカン地域に興味を持つ一般の方や学生の姿もあり、様々な層の聴衆にバルカン地域研究のあり方、そしてこの地域を研究することの魅力を伝える格好の機会になったのではないかと考えている。

また、分野・所属機関・所属学会の枠を超えた研究者間の交流および今後の協力体制に関する議論ができたことについては、バルカン地域研究者間の協力体制の構築という本ワークショップの掲げた目的の達成に一定の成果があったと考えている。尚、本企画では規模と時間の都合上、文学、民俗学、社会学といった分野をカバーすることができなかったが、今後研究者間の協力体制をより一層拡大・強化していくことができたらと考えている。

最後になるが、本ワークショップを開催するにあたり、本会会員からも多くの協力を賜った。中でも企画段階で多くのアドバイスをくださった野町素己氏（北海道大学）、基調講演だけでなく開催場所の手配も引き受けてくださった三谷恵子氏（東京大学）、そしてセッションの司会を快諾してくれた銚川貴久氏（東京大学・院）にはこの場を借りて改めて感謝の意を示したい。

尚、本ワークショップを開催するにあたり、ホームページ上およびメール等による広報活動において東欧史研究会、日本古代ロシア研究会、日本セルビア協会、日本ロシア文学会、ハプスブルク史研究会、ロシア語研究会木二会にご協力いただいた。この場を借りて関係者のみなさまに心より深謝申し上げる。また、ワークショップ会場におけるバルカン関係書籍の展示では株式会社明石書店より甚大なご協力を賜った。重ねて深く御礼申し上げたい。

注

- 1 報告者および討論者の所属はワークショップ開催時のものである。
- 2 トドロヴィッチについては、柴宜弘・2017。「ロシア語教師ドゥシャン・トドロヴィッチと第一次世界大戦——辺境地域出身者のナショナル・アイデンティティ」、『中欧研究』3: 1-25 頁を参照。



ワークショップ当日の様子（写真提供：岡野 要）